２０２１年度武蔵高等学校卒業式校長式辞（２０２２．３．１８）

校内の小彼岸桜も満開になりました。この春の良き日に、２０２１年度武蔵高等学校卒業式を開催しましたところ、池田康夫学園長並びに保護者の皆さまのご臨席を賜り、盛大に挙行できますことを嬉しく存じます。

第９６期生の１６７名の皆さん、卒業おめでとうございます。皆さんは、本日をもって１０代の多感な時期を過ごしたこの武蔵を巣立っていきます。

皆さんの武蔵時代の後半は、まさに世界中を覆った新型コロナウイルスに翻弄された学生生活でした。コロナが始まり、全国一斉休校の措置が取られたのはちょうど二年前、皆さんが高校１年生の３月でした。さあ、いよいよ高校２年生として、部活においても学校行事においても、さらに国外研修などその他校外行事においても、武蔵生活の集大成として頑張ろうと張り切っていた折りのことでした。その後２年間、第１波から第５波までの感染の波を繰り返しながら、何とか武蔵での学びを継続し、本日、卒業式を迎えることとなりました。

しかし、私は、そうした中にあっても奮闘した皆さんの頑張りを讃えたいと思います。例えば、第９９回記念祭は、オンラインと対面を取り混ぜながら、様々な工夫を講じて実現にこぎつけました。また、コロナ禍において中断を余儀なくされた校長面談ですが、皆さんとはコロナ禍のおかげで、中断直前の高１の時期と、再開後の３年２学期の二回、実施することができました。二度の面接でしたが、私はその間の皆さんの成長を実感しました。このコロナ禍においても、それぞれ将来を見据え、「たった一度の人生で何をするのか」という私の問いかけに、それぞれ真摯に考えている９６期生諸君を頼もしく思ったものです。

その９６期生の皆さんも本日でこの武蔵を去って行きます。一抹の寂しさを感じながらも、万感の思いを込めて、卒業生諸君に餞の言葉を贈りたいと思います。

それは「独創的で柔軟な人であれ」ということです。

藤原和博というリクルートから東京の民間人校長として活躍された方がいます。彼は、こんなことを言っています。

これまでの社会で価値があるのは「みんな一緒」、これからの社会で価値があるのは「それぞれ一人ひとり」。特にこれからの社会で稼ぐには「自分の希少性をあげる」こと

が重要。また、「みんな一緒」の社会では、「正解」を素早く言い当てる力、すなわち「情報処理力」があれば成功できたけれど、「それぞれ一人ひとり」の社会では正解はなく、「情報処理力」よりも「情報編集力」が求められる。つまり、自分の知識・技術・経験に、他者の知恵や技術もたぐり寄せて、実行しながらかつ修正し続けていく編集力である。そうした力を持った者が成功し、活躍すると述べています。

私も全くそのとおりだと思います。「自分の希少性をあげる」こと、かつ「情報編集力」を持つこと。それが、個人の成功につながり、かつこれからの社会で求められる人材になると思います。

言うまでもなく、武蔵の教育は、そうした力を育んできました。「みんな一緒」ではなく、「それぞれが個性を発揮」する。そして他者を排斥するのではなく、他者とリベラルにつながることを大切にする教育です。

別の言葉で言えば、「独創性」と「柔軟性」を大事にしてきた教育です。
そして、今卒業という節目に際し、皆さん方に望むのは、改めて人生において「独創的かつ柔軟であれ」ということです。武蔵で培った「独創性」と「柔軟性」をさらにさらに磨いていってほしいと期待します。

ただ、独創的というのは、「目立ったことをする」とか、「奇をてらう」ということではありません。そうではなく、自分が本当に大切にしたいことをやる。自分が実現したい価値を大事にする。そのことが結果として、「人の歩いていない道を歩む」という独創性につながると私は思っています。

卒業生として経験談を話します。

私は、武蔵に在学していたときは「武蔵はいい学校だな」と思う一方で、なんとなく「狭い世界で自由を享受している」ような感覚をもっていました。

もっと「地に足をつけた生き方がしたい」。「ささやかでも人の役に立ちたい」。そんな思いから、大学では地域でのボランティア活動をしながら、様々なことを考え、卒業後は公立学校の教員の道を選びました。

ところが、その際に両親から大反対を受けました。「武蔵を卒業させて、大学さらに大学院まで行かせて、学校の先生というのはだめだ」というのです。今思えば失礼な発言だと思いますが、おまけに教員採用試験も不合格だったものですから、本当に大変でした。

そこで、私は家を飛び出して一人住まいをはじめ、臨時教員としてスタートを切りました。その後３５年間の公立高校や教育行政での経験を踏まえ、奇遇な縁で母校に戻り、今、校長として、このように皆さんに語りかけています。

本当に不思議です。私は初めから、武蔵の教員になりたいと思ったわけでもなく、まして校長になりたいと思ったわけではありません。ただ、様々な出会いや運命の結果で、母校に戻りました。スタート地点は、ただ単に「地に足を付けた生き方がしたい」「人の役に立ちたい」と思っていただけだったのに、振り向けば、ある意味では、他の人とは違う独創的なキャリアを描いていたと思います。

だから、皆さんに言いたいのは、「たった一度の人生。人目を気にせず、自分のやりたいことをやれ。そして道なき道を切り拓いていけ」ということです。何とかなるものです。加えて、自分だけが突っ張るのではなく、どんなときも他者と協働しながら、自分の価値を高めていく柔軟性も持って欲しいと思います。

パンデミックで翻弄された君たちだからこそ、そして今、ウクライナ侵攻という、人類が２０世紀から２１世紀にかけて掲げてきた自由や多様性という価値が問われている時代だからこそ、９６期生諸君には、自分なりの独創性と柔軟性を発揮し、世界のどこかで、この世界を支えてほしいと願います。

加えて一言。人生にはうまくいかない逆境もあります。そんな逆境のときにそれを乗り越えるための魔法の言葉を、皆さんが製作している卒業アルバムにしたためましたので、紹介をします。

それは「においあくま」です。にげるな、おこるな、いばるな、あせるな、くさるな、負けるな。この、逃げるな、怒るな、威張るな、焦るな、腐るな、負けるなの頭文字をとって「においあくま」です。通常は、「おいあくま」と言われることが多いですが、９６期生諸君に贈る言葉には「に」も付けました。人生には逃げたいときも、逃げた方がいいときもあるでしょう。でも、逃げるな。私も肝に銘じたいと思います。特に来年度、捲土重来を目指す諸君もいるでしょう。頑張ってください。

最後に、ご参列の保護者の皆さま方に一言御礼申し上げます。これまで武蔵の教育にご理解ご協力いただき誠に有り難うございました。中高という多感な時期でしたので、はらはらされたこともあるでしょうし、私どもがいたらない面も多々あったと存じますが、教職員一同、精一杯やらせていただきました。ご容赦いただきたいと存じます。本日、入学

したときのあどけない少年が、たくましい若者として立派に成長したことを、心から嬉しく思います。ご子息のご卒業で本校とのご縁はいったん切れますが、今後とも武蔵の教育を陰ながら支えていただけたら有り難く存じます。

　結びになりますが、９６期生１６７名すべての前途洋々たる人生を心から祈念し、私の式辞といたします。